

大学体育祭と学生のスポーツ志向との関係

五十嵐 幸 一

1 はじめに

2020年の東京オリンピックをはじめ、近年わが国ではスポーツイベントの関心が高まっている。イベントは社会的効果ならびに経済的効果が期待されており、スポーツイベントにおいても同様な効果をもたらすといえよう。経済的効果については、道路などのインフラの整備、第一次波及効果、第二次波及効果などと合わせて、いわゆる経済波及効果として消費の拡大、経済活性化が期待されている。この経済波及効果はオリンピックなどのメガイベントを誘致する大きな理由の一つであるといえる（中島ら2010）。社会的効果としては、スポーツの実施によって生じるコミュニケーションの形成が上げられる。これはスポーツを行う人同士のコミュニケーションばかりでなく、イベント開催に協力した人たちのコミュニケーションや開催地の地域コミュニティの形成なども含まれよう。

スポーツイベントは、オリンピックや世界選手権のようなメガイベントばかりではない。連日行われているプロ野球や、Jリーグ、高校生の全国大会であるインターハイや高校野球をはじめ、市町村主催のマラソン大会や学校の運動会や体育祭、愛好者が集まって行ういわゆる草野球などもスポーツイベントである。大会の規模や参加人数などの違いはあるが、内包している要素は同じであり、特に共通している要素として上げられるのは、コミュニケーションである。

一方、このようなスポーツイベントはその後のスポーツライフに影響を及ぼすことも少なくない。スポーツ白書（SSF 笹川スポーツ財団2011）は2000年から2010年までの10年間のスポーツ実施状況を報告しているが、それによると、定期的な運動・スポーツ実施者の割合は増加傾向にあり、男女差は縮まっていること、イベントなどの不定期な運動・スポーツ参加者の割合は、男性が女性よりも多く、これが運動・スポーツ実施率の男女差を生んでいるとしている。あくまでも推測であるが、スポーツイベントでの快・不快の感覚がその後のスポーツライフに影響を及ぼすことも考えられる。

本学のスポーツイベントといえば、10月に行われている体育祭があげられる。これは、学友会、特に体育会に所属するメンバーが企画し、1年生を主な対象として学園祭開催時期に行われている。平成26年度の内容としては、学科を基本とした1年生7チームに学友会の有志チームを加えた計8チームが、球技を中心としたスポーツ種目を行い、対抗得点を競った。この体育祭の趣旨は毎年若干異なっているが共通している要素は「参加者同士のコミュニケーション」である。しかし、実態としては学生が主体となって行われているものであるがゆえ、様々なトラブルを抱えていることも事実である。特に準備が不十分であることや、競技運営がスムーズでないなどの運営上の問題点が多い。主催者側としては、一生懸命にやっているのだが、参加者にそれが十分

に伝わっていないこともしばしばである。体育祭への参加はスポーツの本質からすると、自由参加にするべきであるが、大学行事であるという側面と全く自由参加にした場合、参加者数が読めない等の理由から1年生は半強制的に参加させているというのが現状である。

また、本学学生のスポーツ参加率は決して高くない。スポーツ白書（SSF 笹川スポーツ財団 2011）は2010年の20代の年1回以上、週2回未満のスポーツ実施率を38.6%と報告しているが、五十嵐（2010）は本学1年生の調査で78.7%の学生が大学体育館を授業以外で普段ほとんど使わないと報告している。このことは本学学生のスポーツや運動への関心が同年代より低いことを意味しており、将来的な健康の不安をも助長させるものと懸念される。これらのことから、スポーツを行わない阻害要因を明らかにし、それらを取り除くべく対策を講じることが、スポーツ実施率を向上させ、ひいてはスポーツイベントへの積極的な参加を促すものとする。

本研究は本学体育祭のアンケート結果と参加者のスポーツ志向、特にスポーツ参加の阻害要因を明らかにすることにより、スポーツイベントの参加率を上げるための基礎的データを得ることを目的とする。

2 調査方法

2-1 体育祭アンケート

2014年10月23日に行われた本学体育祭についてのアンケート調査を、その翌週に実施した。対象は体育祭に参加した本学1年次生男女193人である。

各項目の評定尺度は5段階とし、その表現は「1-悪い」「2-あまり良くない」「3-普通」「4-良い」「5-大変良い」とした。

2-2 スポーツ参加の阻害要因に関するアンケート

参考文献をもとに、スポーツ参加の阻害要因に関する17の尺度項目を設定したアンケート用紙を体育祭アンケートと同時に発行し、回収した。各項目の評定尺度は5段階とし、その表現は「1-そうではない」「2-あまりそうではない」「3-どちらでもない」「4-だいたいそうである」「5-そのとおり」とした。

このようにして集められた調査票をもとに、以下の考察を進めることとする。調査票総数は193であった。このうち欠損値の多い5枚の調査票を除外した。有効回答率は97.4%（計188、男性95、女性80、不明13）であった。

2-3 分析

体育祭アンケートについては、各項目の評価尺度の平均値をもとに考察を加えた。なお、男女の比較を行うために、男女別の平均値を算出し、t検定を行った（表1）。

スポーツ参加の阻害要因に関するデータの分析として、まず17項目の平均値、標準偏差を算出した。天井効果、フロア効果の見られた項目はなかった。次に主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は、5.06、3.02、1.20、1.04…というものであり、3因子構造が適当と考えられ

た。そこで3因子を仮定して、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果十分な因子負荷量を示さなかった(4以下)1項目を分析から除外し、再度主因子法・Promax回転による因子分析を行った。ここで、因子間の相関を見たところ、第1因子と第2因子の相関がほぼ直交(0.2)していたため、再度2因子を仮定し、更に十分な因子負荷量を示さなかった2項目を分析から除外し、主因子法・Varimax回転による因子分析を行った(表2)。累積寄与率は45.81%であった。

また、因子分析によって決定された下位尺度の内的整合性を検討するためにCronbachの α 係数を算出し、さらに男女差の検討のために下位尺度得点を算出した。

3 結果と考察

3-1 体育祭アンケートについて

3-1-1 全体

表1は体育祭アンケートの結果である。ここでは、評価レベル3「普通」を基準として考察を進めることとする。全体の満足度の値は平均値3.23と「普通」以上の評価であり、おおむね不満の少ないイベントだったことが推察される。各項目の値を見ると、競技種目設定が平均値3.24であり、行われたスポーツ種目の設定は全体として不満の少ないものであったといえよう。また、当日の受付、開会式、スタッフの動き、閉会式についてもそれぞれ平均値3.00以上の値を示していることから、これらの点に関しては、おおむね不満はないイベントだったことがわかる。逆に値が低かったのは平均値2.70の開催告知、2.83のプログラム進行であった。開催告知に関しては、このイベントに向けた主催者側の動きが遅く、10月下旬に体育祭を行うにもかかわらず、種目の説明やチーム分けのアナウンスなどが、10月中旬になってしまったこと、チームによっては体育祭当日に種目選択をするという事態になってしまったことが、低い値になった理由として上げられる。プログラム進行については、全体の終了時間は予定通りだったが、各種目の開始時間の遅延などが低い値になった原因であろう。いずれにしろ、開催告知、プログラム進行ともにイベントを行う際の事前準備が不十分であったといえる。

表1 平成26年度 体育祭参加者アンケート評価の結果

項目	全体 (n=188)		男性 (n=95)		女性 (n=80)		t 値
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
競技種目設定	3.24	.85	3.27	.87	3.21	.79	.48 ns
開催告知	2.70	.95	2.80	1.04	2.64	.77	1.16 ns
当日の受付	3.12	.89	3.15	1.03	3.13	.66	.17 ns
開会式	3.18	.83	3.19	.95	3.21	.67	-.18 ns
スタッフの動き	3.17	.82	3.19	.98	3.16	.65	.21 ns
プログラム進行	2.83	.90	2.83	1.03	2.84	.74	-.12 ns
閉会式	3.16	.78	3.20	.91	3.14	.65	.52 ns
全体の満足度	3.23	.90	3.16	1.01	3.31	.76	-.97 ns

※全体は性別不明を含む

3-1-2 男女の比較

表1より男女の評価値を比較すると、平均値の比較で、開催告知は女性の方が低い評価を示し、全体の満足度では男性の方が低い評価を示してはいたが、いずれの項目も統計的に有意な差は見られなかった。このことから、体育祭を行った印象として、男女の差違はほとんどないといえる。

3-2 スポーツ参加の阻害要因について

3-2-1 因子の解釈

表2より各因子は次のように解釈された。第1因子は「身体を動かしたくない」、「人との付き合いが面倒」、「イベントには参加したくない」など、スポーツに関して消極的な内容の項目が高い正の負荷量を示していた。そこで「消極性」因子と命名した。第2因子は「適切な情報が不足している」、「施設の利用条件が合わない」、「利用できる施設が少ない」など、自分の置かれている環境に関する内容の項目が高い正の負荷量を示していた。そこで「環境」因子と命名した。

表2 スポーツ参加の阻害要因の因子分析結果表
(Varimax 回転後の因子パターン)

項目内容	I	II	共通性
身体を動かしたくない	.84	.00	.70
人との付き合いが面倒	.80	.09	.65
イベントには参加したくない	.80	.07	.64
興味がない	.72	.09	.53
勝敗がつくことは避けたい	.66	.04	.46
強制的に参加させるべきではない	.50	.11	.27
適切な情報が不足している	.40	.84	.70
施設の利用条件が合わない	.80	.78	.62
利用できる施設が少ない	-.90	.72	.52
指導者がいない	.13	.57	.34
相手や仲間がいない	.22	.54	.35
費用がかかりすぎる	.04	.50	.25
設備の不備	.03	.46	.30
スポーツを行う時間が足りない	-.02	.32	.10
因子寄与	3.37	3.04	6.41
寄与率	24.08	21.73	45.81

3-2-2 下位尺度間の関連

スポーツ参加の阻害要因の2つの下位尺度間の関連を示したのが表3である。消極性得点(平均2.88,SD .90)、環境得点(平均2.99,SD .72)が得られた。内的整合性を検討するために各下位尺度の α 係数を算出したところ、「消極性」で $\alpha=.87$ 、「環境」で $\alpha=.83$ と十分な値が得られた。また、スポーツ参加阻害要因の下位尺度間相関は有意な正の相関を示した。

表3 スポーツ参加阻害要因の下位尺度間相関と平均、SD、 α 係数

	消極性	環境	平均	SD	α
消極性	—	.21**	2.88	.90	.87
環境		—	2.99	.72	.83

**p<.01

表5 男女別相関係数

	消極性	環境
消極性	—	-.01
環境	.37**	—

**p<.01

右上:女性, 左下:男性

表4 男女別の平均値とSDおよびt検定の結果

	男性 (n=96)		女性 (n=79)		t 値
	平均	SD	平均	SD	
消極性	2.81	.97	2.93	.87	-.90ns
環境	3.03	.80	2.90	.64	1.22ns

3-2-3 男女差の検討

スポーツ参加の阻害要因における男女差の検討を行うために、下位尺度得点についてt検定を行った(表4)。その結果、消極性下位尺度($t(173) = -.90, ns$)と環境下位尺度($t(172) = 1.22, ns$)の男女間得点差はいずれも有意ではなかった。このことは体育祭アンケート評価の男女差に有意な差がなかったことと一致する。

3-2-4 男女別の相関

男女別のスポーツ参加阻害要因下位尺度の相関係数を表5に示す。男性では環境と消極性が有意な正の相関を示したのに対し、女性では相関関係は認められなかった。これは、男性はスポーツを行いたくないときには、「情報が少ない」、「施設が良くない」等の「環境」を理由にしてスポーツからの回避行動を示すのに対し、女性は環境などの理由とは無関係に「やりたくないものはやりたくない」というような自分の意志に基づいたスポーツ回避行動を示したのではないかと考えられる。田中ら(2008)は短期大学部学生の調査で「運動・スポーツに参加したいと思わない人は、結果予期も低い但有能感が顕著に低く、自分の体力・健康・運動技能に自信がないと考えている」と述べている。また、西村・山口(2003)は、中年期女性に対する調査で、「(運動が)「できなかった」事実が不快経験として心に残り、運動・スポーツへの自信の無さや劣等意識を生み、非実施へとつながる悪循環が生じている」と述べている。これらのことから考えると、男性のスポーツ実施率を上げるためには環境要因の改善が必要であり、女性のスポーツ実施率を上げるためには、スポーツに触れる入り口である小・中学校期の体育活動実施における成功体験が必要であることが示唆された。

3-3 まとめ

体育祭アンケートとスポーツ参加の阻害要因に関するアンケートから本学体育祭の積極的な参加を促すために考えられることは以下の通りである。

- 1) 体育祭への参加を促進するためには、体育祭アンケートの結果、評価の低かった開催告知、プログラム進行の改善が望まれる。具体的には事前の準備を早期に行い、ポスターなどにより参加者への告知を早期に行うことと、種目説明時にきちんとした説明をすることがあげられる。また、当日のスケジュール管理を行うために、事前のシミュレーションを綿密に行うことが必要である。
- 2) 参加者自体への対応として、男子に対してイベントへの参加を促すためには、施設や用具等を整えるとともに、事前にチームを決めることにより、参加者同士のコミュニケーション作りの機会を与えることが必要である。女子に対してはイベント以前の経験が参加に影響を及ぼすことから、例えば授業中でスポーツの成功体験を増やすなどの教員の協力も必要であると思われる。

4 要約

本研究はスポーツ参加の阻害要因を明らかにし、スポーツ参加率を上げるための基礎的知見を得るために本学体育祭を事例として、参加者 193 人にアンケート調査を行った。結果は以下の通りである。

- 1) 体育祭の男女の評価に有意な差は認められなかった。
- 2) スポーツ参加の阻害要因として 2 つの因子を抽出した。それぞれ消極性因子、環境因子と名付けられた。
- 3) 男女差の下位尺度得点については消極性因子、環境因子とも男女に有意な差はなかった。
- 4) 男女別の下位尺度の相関係数は、男性は有意な相関を示したが、女性は相関関係が認められなかった。これはスポーツ阻害要因の関係性に男女で違いがあることが示唆された。

引用・参考文献

- 飯干 明・奥 保宏・南 卓己 (2002) 大学生における運動・スポーツの実施状況と阻害要因に関する調査研究. 鹿児島大学教育学部研究紀要 教育学編 54:21-31
- 五十嵐幸一 (2010) 大学スポーツ施設の利用と学生志向との関係. いわき明星大学人文学部研究紀要 23:41-47
- 大木昭一郎・寄金義紀・高橋伍郎・松田義幸・阿部一佳・後藤邦夫・宮下 憲・橋 直隆・鍋倉賢治・嵯峨 寿・伊藤信之・柵木聖也・斎藤隆志・松村浩貴 (1992) 筑波大学体育専門学群生の学生生活及びスポーツ観、職業観に関する調査報告. 大学体育研究 14:87-146
- 金芳保之・松本芳明 (1997) 現代社会とスポーツ文化 大修館書店
- 川西正志・野川春夫 (2002) 生涯スポーツ実践論 市村出版
- 澤井和彦 (2003) 大学生のスポーツ活動と意識生活に関する調査研究. 東京大学大学院教育学研究科紀要 43:381-387
- 杉山佳生 (2008) スポーツ実践授業におけるコミュニケーションスキル向上の可能性 大学体育学 5:3-11
- 田中靖久・坪井 宏・生方 謙・笠井妙美・植村隆志 (2008) 大学短期大学部の運動・スポーツ参加に関する研究——運動・スポーツの実施状況と心的阻害要因を中心として——東海大学総合経営学学部紀要 1:45-56
- 神 文雄・犬飼義秀 (1982) 長崎県民の健康・スポーツに関する調査研究——成人のスポーツ活動における性差. 長崎大学教養部紀要 22:215-222
- 諏訪信夫・井上洋一・齋藤健司・出雲輝彦 スポーツ政策の現代的課題 日本評論社
- 中島弘毅・成耆政・鈴木尚通・大塚貴史・葛西和廣・竹内信江・田中正敏 (2010) 地域スポーツイベントにおける経済波及効果の計測と地域活性化戦略の構築——「第 1 回塩尻市ぶどうの郷ロードレース」の分析を中心に—— 松本大学地域総合研究 11:97-133
- 並河 裕 (1996) ライフスタイル要因からみた運動経験者に関する研究——過去の運動経験とライフスタイル要因との比較——. 琉球大学教育学部紀要 48:303-313
- 西村久美子・山口泰雄 (2003) 運動・スポーツ非実施へいたるプロセス スポーツ社会学研究 11:87-101
- 藤田 勉・杉原 隆 (2007) 大学生の運動参加を予測する高校体育授業における内発的動機づけ. 体育学研究 52:19-28
- 藤本淳也 (2012) 人を動かすスポーツ 人間福祉学研究 5-1:25-37
- 山下秋二・原田宗彦 (2005) 図解スポーツマネージメント 大修館書店
- SSF 笹川スポーツ財団 (2011) スポーツ白書 笹川スポーツ財団 p23

(いがらし こういち/体育学)